新　年　を　迎　え　て

会長　中　野　　宏*

会員の皆様，明けましておめでとうございます．私が会長に就任しましてから9カ月が経つたわけですが，この間に皆様からいただきましたご支援とご協力に対し心から感謝申し上げます．新しい年を迎えますと，また新たな希望と勇気が湧いてくるものですが，今年も皆様と一緒になつて協会の一層の発展のために努力を重ねたいと存じますので，よろしくお願いいたします．

顧みますと昨昭和 47 年は，鉄鋼業界にとっては不況カルテルに明け不況カルテルに暮れるという厳しい1年でありました．ただし，業界の努力と政府の景気助成策の効果がようやく現れて後半立直りの気配を見せ始め，量的にも 10～12 月の粗鋼生産高は年産1億トンのペースに乗るに至るなど，2年半にわたる不況から脱しかけたという状況まで回復することができました．しかし需給ギャップの問題，コスト上昇の諸要因，国際経済環境，資源・エネルギーの問題など多くの困難な問題は依然横たわっており，楽観を許すどころか，いよいよ決意を新たにして対処していかねばなりません．この厳しい難局の中にあつても，近代産業の基礎としての鉄鋼業は，人類社会の福祉向上に一層寄与するためにも，また自らの発展のためにも，困難を克服して前進せねばならないという使命を負つているといえます．

このように量的急伸の時代が過ぎたといえる鉄鋼業としては，品質においてより優れ，より付加価値の高い製品を世に出すことが従来にまして重要であることは申すまでもありません．そのためには鉄鋼のみならず，その周辺を含めての学問・技術の発展がより一層強く要請されるところであり，その意味からも当協会の果たすべき役割はいよいよ重大であると痛感される次第であります．

ここに昨年における協会の活動を振返つてみますと，まず「鉄鋼製造法」(全四巻)が刊行されたことが挙げられます．これは昭和 44 年にこのための編集委員会（委員長：佐藤忠雄氏）が設けられ，各部門にわたり学界・業界の第一線に活躍中の研究者・技術者約 150 名により分担執筆いただいたもので，鉄鋼製造法に関する最新の知識を集約しており，関係者に稗益するところがまことに大きいと信じております．執筆・編集に当たられた各位に深く感謝いたします．当協会としてはこのような出版物を機を見て刊行して参りたいと存じます．

次に，焼結炉排煙脱硫の共同研究があります．申すまでもなく環境問題は業界としての最重要課題のひとつでありますが，当協会においては日本鉄鋼連盟の依頼を受け，高炉各社参加のもとに，排煙脱硫試験委員会（委員長：豊田茂氏）を設置して共同研究を実施しております．この研究には通産省工業化研究開発補助金を受けておりますが，第1段階として焼結炉排煙中の硫黄分を硫安に固定する方法の大規模試験において所期の成果を得，引続き石膏に固定する方法について試験を実施しております．遠からずこれも成果を生むものと期待しております．

鉄鋼業のエネルギー消費は莫大であり，わが国の総エネルギー消費量の 20% 強を占めていますが，その大部分は輸入化石燃料であります．協会では将来のエネルギー問題に備えて，昭和 43 年に原子力部会を設置し，昭和 44 年には業界として政府に対し高温ガス原子炉の早急な開発を要望するとともに

* 日本鋼管(株)副社長

製鉄への利用技術の検討を行なつてきました．この部会では昭和45年以来，シャフト炉，熱交換器，還元ガス製造などに関する基礎的な研究を，通産省の補助金も受けて実施してきましたが，その実用化には困難な多くの開発を要する問題があり，また広い分野にわたる専門知識を要しますので，政府に大型プロジェクトとして採択されるよう切望している次第であります．

その他，共同研究会各部会，各委員会などでそれぞれ活発な研究，意見交換が行なわれ，多大の成果を得ました．今年も引続いてこれらの研究活動が精力的に推進されることを期待しております．

次に国際技術交流でありますが，経済大国としてわが国が立たされている国際的な立場，わが国鉄鋼技術の水準などから考えて，諸外国との技術交流は国際協調の一翼を担う民間外交の役目をも果たすものであると思われます．昨年の日中国交回復に伴い，当協会では学会としての立場で，まず文献交流などから始めて，友好関係が得られるよう中国金属学会に書簡を送りました．

昨年も海外で開催された鉄鋼関係のいろいろな国際会議に日本から多くの人が参加しましたが，当協会としても直接代表を派遣するほか種々の面で協力をいたしました．今年は日本において鉄鋼に関係のあるいくつかの国際会議が開催されます．まず5月下旬には第4回日ソ製鋼物理化学シンポジウムが東京で催されます．これはご承知のように1967年の第1回以来1年おきに開催されているもので両国の鉄鋼科学の発展のために互に得るところの多い交流会議であります．続いて6月上旬には，第4回真空冶金国際会議および第4回エレクトロスラグ国際シンポジウムがいずれも東京で開かれます．この両会議には各国から多数の参加を得て活発な討論がなされることと期待しております．このように国際会議が各国持廻りで行なわれることによつて，学術・技術の国際交流が一層盛んになることは大変有意義なことと考えます．

また国内他学協会との協力関係も大切だと思います．鉄鋼の学問・技術の発展には周辺領域の学問・技術の発達に負うところが少なくありませんでしたが，今後はその傾向はますます強くなるものと思います．とくに原子力製鉄などは境界領域・周辺領域を含めて多角度からの検討を要する問題であり，それらに対処するに当たつては関連学協会との緊密な協力体制が必要と考えます．

以上のような諸活動を通じ，当協会は日本のそして世界の鉄鋼学術・技術の進歩発展に貢献してゆくべく，会員一同協力して努力・工夫を重ねて参りたいと存じます．

昨春会長就任に際しまして，“マンネリズムに堕ちぬように”ということを申し述べ，協会の運営について更によく見直し，より合理的な運営方法をとりたい旨を申し上げました．昨年の終りに協会の事業についてのアンケート調査を実施いたしましたが，これは協会事業に対する会員の皆様の認識を深めると同時に，衆知を集めて協会のよりよき運営方法を検討し，歴代の会長はじめ役員の方々が中心となつて礎き上げてきた業績を基礎に，一層の飛躍をはかりたいという意図によるものであります．アンケートにご協力下さつた皆様に厚く感謝申し上げます．その結果は目下集計中ですが，寄せられた貴重なご意見を今後の運営に大いに活用させていただく所存であります．今後ともお気付きになつたこと，お考えになつていることについて広く会員の皆様から積極的に意見をお寄せ下されば幸いと存じます．

終わりにのぞみ，会員の皆様の一層のご活躍，ご研鑽とご多幸をお祈りしてご挨拶といたします．